

魔法少女
ニア
狂愛と搾精に溺れる乙女

下山田ナンプラーの助
挿絵／露田米

試し読み版

18
未 満

第一章	姉との再会、迫る狂愛	006
第二章	搾精の日々、奪われた純潔	059
第三章	姉との再戦、加速する陵辱	114
第四章	集まる魔力、止まらない淫欲	162
第五章	姉との決別、穢れゆく精神	211
最終章	崩壊する心、堕ちた魔法少女	260
電子限定エピソード	偏愛の断片 乳絶頂する冥愛	303

登場人物紹介

Characters



おとわしあ 音羽詩愛

魔法少女だった姉との再会を夢見つつ、人間のために魔人と戦う魔法少女。誰に対しても優しい純粋な女の子。



めあ 音羽冥愛

詩愛の姉で、詩愛への歪んだ愛情だけが行動原理の少女。身体を触手に変身させることができる。

クロケル

詩愛に魔法少女の力を与えた黒い兔のような使い魔。どんな時も詩愛の味方になってくれる頼れる相棒でもある。

第一章 姉との再会、迫る狂愛

「こっちだシア！ 魔人の気配がする！」

「うん、わかってる！」

一人と一匹が、夜の街を疾走する。

人間の方は学生服を身にまとった年若い黒髪ショートボブの美少女で、彼女に追従する猫ほどの大きさの黒毛の生き物は羽根もなく空中を浮遊していた。

中等部生くらいに見える少女だが、運動をやっているようには見えない走り方の割にその足は妙に速い。

風を巻いて駆け抜ける彼女に、すれ違う人々は驚いて振り返るもその頃にはすでに少女の姿は小さな点となって闇に消えている。

人通りの激しい往来から離れ、少女がたどり着いたのは町はずれの工場跡。

明かりもなく無駄に広く、音がやたらと響くその空間内で、制服少女は足を止めて呼吸を整える。

彼女に遅れてやってきた、ふわふわの黒毛に赤目でウサギのような耳を持つ愛くるしい

姿の生き物が口を開いた。

「誘い込まれている。油断しないで」

「だいじようぶ。ここなら人も巻き込まないし——」

それに対する少女の答えは、轟音にかき消され。

瓦礫を突き崩し、何かが突如として廃工場内で暴れ出し。

少女を前に、人ならざる巨体が咆哮する。

「アアアアアッ！」

空間を震わし、大地を裂く声量。

その声に誘発されたのか、同じような異形の巨体がもう二体工場内で暴れ出す。

「グ……ア、アアアア！」

「殺す……犯す！」

魔人、とそれらは称された。

この世のものとは思えない叫び声を上げながら、巨軀を駆って少女へ向かっていく二体の異形生命体。

三倍以上の身長差があるにもかかわらず、魔人を前にしても学生服の少女は動じない。静かに目を閉じ、七色に輝くブレスレットをはめた右腕を高く掲げて。

「魔力……解放！」

そう叫ぶや否や、夜を昼にするかのごとき眩い光に彼女の身体が包まれ学生服は消失し、中等部生徒にしては発育の良い肢体があらわになる。

だがそれも一瞬で、あっという間に少女は白を基調にピンクを差し色とする華美なコスチューム姿となり、素朴なイメージの黒髪ショートボブは桃色に変わって少し伸び髪飾りが現れ、一転して可愛らしいツーサイドアップへと変わった。

さらに少女の頭上、何もなかった空間から突如として輝く円環が現れる。

まるで魔法のステッキを長く伸ばして輪にしたような、星やハートマークの意匠が見られる直径一メートルほどのそれは、体操などで使われるフープを思わせる。

そんな魔法のフープが少女を囲うように下りてくると、少女はそれを腰で軽やかに回した後、敵となる魔人へビシッと向けて名乗りを上げた。

「魔法少女シア、参上っ！」

日本は近年の著しい環境変化と大気汚染に伴い、大都市圏を中心として目に見えない物質が空気中に滞留するようになった。

現代科学では認識もできないその物質は、特定の間人および動物と反応し対象に変化を

もたらず。

変化は対象によって細部が異なるが、共通する点は体躯たいくが大きくなり、それに伴い膂力りよりよくが数倍に増すほか、魔力という非物理的な力を行使する個体も現れる。

さらに理性が薄れ、破壊や快楽を求める動物的な行動がみられるようになる。

人や動物を凶暴化させ、周囲に危害を与える未解明なその物質は「魔」と呼ばれ。

魔が人と反応すれば「魔人」に、動物と反応すれば「魔獣」となる。

魔人・魔獣は一般人には視認できず、彼らが暴れていても「謎の怪奇現象」として認知されるにとどまっていた。

今はまだ限定的な範囲での被害だが、このまま放っておけば大変なことになってしまう。しかしながら、そんな魔人・魔獣に対抗できる存在がいなかったわけではない。

魔は決して、負の側面だけを持つ物質ではなかった。

数は少ないが、極めて純真無垢な心を有する若い少女と反応することで対象に強い魔力を与え、魔人を認識でき、彼らに打ち克かつ存在へと昇華させる。

魔をもって魔を滅する少女、すなわち魔法少女として。

——と、「契約」の折に少女はそう聞かされた。

彼女は普段こそ学園の中等部に通っている、大人しそうな見た目で心優しい少女だが、

こうして魔人の気配を探知した際には華々しいコスチュームに身を包み邪悪を打ち破る。

黒い小動物の姿をした愛くるしい使い魔を従属させ、自らの魔力を解放させて魔人と戦う存在。

少女の名は音羽詩愛^{おとわしあ}こと、魔法少女シア。

「アアアッ！」

「待ってて、いま元に戻してあげるから！」

破壊衝動と性衝動のまま、三体がかりでシアへ襲い掛かってくる魔人たち。大きく跳んで彼らから距離を取りつつ、シアは空中で身体をひねってフープを振り抜くと、そこからは幾筋もの光が弧を描きながら魔人へ飛んでいき命中し弾ける。

大きなフープを華麗に可憐に振り回し、二度、三度と魔人たちへ攻撃を重ねていくシア。一体目が倒れ、二体目もうめき声を上げて地に伏せる。

しかし最後に残ったひとときわ大型の魔人は何発もの光を浴びながらも強引に突進し、木のごとき腕を振り下ろす。

「危ない！」

「くう……っ！」

使い魔が声を上げ、シアはフープを正面に向け輪の部分から魔力の円形障壁を形成する。

衝撃が地面を陥没させるほどの重い一撃だったが、シアの魔力壁はそれに持ちこたえ魔人を押し返した。

「今だ、シア！」

「うんっ！ 魔力……最大解放！」

フープから防御魔法を消し去り、そのまま円の中に魔人の姿を入れるよう空中で留め置き、魔力を溜めて一気に放つ。

直径一メートルほどの太い七色のビームは、隙を見せた魔人に至近距離で直撃。

「ウ……グアアアア！」

低くおぞましい悲鳴を上げ、三体目の異形魔人も吹き飛ばされて動かなくなった。

これで、脅威は退けた。

しかし魔人は頑健であり、ここで放っておけばすぐに回復してまた暴れてしまう。

そのために、シアは倒れる敵に駆け寄って。

まだわずかに息のある魔人の上から、自らの武器である魔法のフープをかざして静かに言葉を紡ぐ。

「魔力……封印」

とたん、フープから優しい光が魔人に降り注ぎ、入れ替わるように彼の身体から黒ずん

だ瘴気のようなものが発生し霧消していく。

シアのもつ純粋な「魔」を魔人の穢れた「魔」と相殺させ、彼から魔を切り離して元の人間に戻したのだ。ついでに回復魔法もかけ、先ほどの戦いで負った傷も治癒する。

これで男性は元通り、人を襲うこともない。

「もう大丈夫、ですからね。……クロ、お願い」

シアはそばで浮遊する黒い使い魔に命じると、ファンシーな生き物はうつぶせの男性の頭に前脚を乗せ、一瞬だけ緑色の光を放つ。

これは「クロ」と呼ばれたシアの使い魔が持つ能力で、対象の記憶の一部分——魔人となつてから今までの——を消去しているのだ。

この記憶干渉を行うことで、目が覚めた人間は魔人だった頃の記憶を失う。

元の人間に戻った際に彼らが良心の呵責に押しつぶされての自殺を図ることなどを防ぐためであり、シアの存在を秘匿する目的もある。

残る二体の魔人にも同じプロセスを踏み、彼ら全員を元の人間に戻すことに成功した。

「……うん、全員後遺症が残った様子もないね。記憶の消去は終わったよ」

「ありがとう、クロ」

使い魔に礼を言って、ふわふわの頭を撫でるシア。彼は気持ちよさそうに空中でクルリ

と身によじった。

それから、ガラス玉のような大きな赤い目を見開いて今の戦いについて言及する。

「それにしても、相変わらず危なっかしいね、君は」

「う……ちよ、ちよっと油断しただけだもん」

おそらく先ほどの魔人に不用意に接近を許したことを咎^{とが}めているのだろう。シアは母親に注意される子どものように口を尖らせた。

「君のお姉さんはもう少し間合いを意識して、窮地に陥ることなく戦っていたけどね。まあ、君も強くなつてはいるけど、そういうところがまだ——」

「……ねえ、クロ」

そこである単語に反応した魔法少女はうつむいて、小さな声で零す。

「お姉ちゃんは……きつと生きてるよね」

「生死不明ってだけさ。イエスともノーとも言えない」

「ううん、きつと生きてる」

いつもの問答が始まった。

魔法少女として戦うたびに、シアは使い魔にほぼ必ずこの問いを投げかける。

問うというよりは、自分自身に言い聞かせるように。

「生きてるん、だもん」

シアこと音羽詩愛は幼い頃、真夜中に家を襲撃した魔人によって両親を殺害されている。その際自分を守ってくれたのが、姉である音羽冥愛めあだった。

動揺し涙すら出なかった幼い自分を泣きながら強く抱きしめ、かけてくれた姉の言葉は今でも覚えている。

—— 大丈夫。詩愛だけはお姉ちゃんが、何があっても守るから。——

—— どんな罪を犯してでも、詩愛だけは守ってみせるから。——
その言葉通りに、冥愛はたった一人で詩愛を守り続けてきた。

親がないことをクラスメイトにからかわれた時も守ってくれた。

姉妹ともども親戚に引き取られそうになった時も、妹は自分が守ると言ってくれた。

詩愛はそんな冥愛が好きで、愛しくて、ずっと一緒にいたいと思っていた。

お姉ちゃんさえいれば寂しくない——それが口癖のようになっていた。

だがそんな姉は、六年前に忽然こっぜんと姿を消し。

—— 初めまして、音羽詩愛ちゃん。ボクはクロケル。使い魔だ。——

入れ替わるように自分の目の前に現れたのが、見たこともない喋る生物。

姉の失踪に消沈していた詩愛に、可愛いけれど胡散臭い「使い魔」はこう語った。

——君のお姉さん、音羽冥愛は生死不明となった。

お姉さんは魔法少女で、君のご両親を殺害した魔人たちを倒す存在だった。あの夜に彼女は目覚めたんだ、君を守るためにね。

それで彼女は今までも、君が眠っている間に家を出て魔人と戦っていたんだ。

しかし先日の魔人との戦いのさなかに建物の下敷きになり、魔力の反応もみられない。

やむなくボクは冥愛との契約を破棄し、彼女と同じ血が流れている君のもとにやってきたんだ。

詩愛ちゃん、君にも魔法少女になれる素質はある。

血筋のこともあるけれど、それ以上に魔法少女は心優しい女の子にしかねない希少な存在なんだ。

だから今、魔法少女になれるのは君しかない。お姉さんの意志を継いで、この世界を魔人から守ってほしいんだ——と。

いきなりそのようなことを言われても困るし理解が追いつかなかったが、結果として詩愛はクロケルとの契約を交わし、魔力を分け与えられ魔法少女となった。

姉は死んだわけではない、きつとどこかで生きている。

それだけを胸に、彼女がそうしていたように自分も戦うことが使命だと思っただから。

そうして今日まで、シアは戦い続けている。

「……瓦礫を撤去しても、お姉ちゃんの遺体は見つからなかったんでしょ？」

「そうだね」

「なら、きつとどこかで元気にしてるよね」

「六年経つても君のもとに姿さえ現さなくてもかい？」

「生きてるよ。お姉ちゃんは、ぜつたい」

意固地になつて話を聞かないシアに「まあ、可能性はゼロじゃないさ」と無難な言葉で会話を終わらせる「クロ」ことクロケル。

シアは優しくして純粹だが、その一方で頑固なところもあり、とりわけ姉のことになるとそれは顕著だった。

クロケルも分かっているため、それ以上の会話をしようとはせず「帰ろうか」と提案する。

変身を解き、元の姿に戻った詩愛も「うん」と頷いた。

（お姉ちゃん、きつと生きてるって信じてるから）

最愛の姉が帰ってきてくれた時に、自分も守られるだけの存在ではないということ。立派に大きくなったところを見せて、安心させてあげないといけない。

(だから、わたしも頑張れるんだよ)

そのために、今日も明日も詩愛は魔法少女シアとなって戦うのだ。

「……ふうっ、これで魔人は全員封印できたかな？」

「お疲れ様、シア。上々だね」

この日も魔人の気配を察知したクロケルによつて、シアは魔法少女としての使命を果たすべく戦っていた。

途中やや危ないところもあったが、四体の魔人を倒し魔力封印を行い元の人間に戻して記憶の消去まで滞りなく完了したところで、シアは黒髪ボブの学生服姿に戻る。

これでまた一步、魔人のいない平和な世界に近づけることができたはず。

(お姉ちゃんが帰ってきたら、わたしのこと褒めてくれるかな)

「さ、帰ろつかクロ。今日は寒いからシチューに……」

そんなその場の充足感といつか訪れる期待感に包まれながら、使い魔に笑顔で振り向いた、その瞬間。

詩愛の表情がこわばり、動きも一瞬だけ止まる。

彼女の視界の先に一瞬だけ映った、長い黒髪の女性――。

「どうしたんだい、詩愛？」

「お姉……ちゃん？」

すでに角を曲がって見えなくなっているが、あの髪とシルエットは見まごうはずもない実姉のものだった——気がする。

そう思ったら、もう止まれなかった。

「今の、絶対お姉ちゃんだった！ わたし、追いかけてくる！」

「ああつ、待ってよ詩愛！ まったく、これまでも何度人違いしてると思ってるんだい」

あの後ろ姿は自分の最愛の姉、冥愛のもの。

そうと確信した詩愛は、地を蹴って彼女を追うべく駆けだしていった。

例によって話を聞かない少女に呆れながら、クロケルも低空飛行でついていく。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「本当に冥愛なら自分から家に来るんじゃないかい？ 人違いだと思うけど」

「そんなことない！ 絶対お姉ちゃんだもん！」

横で至極まっとうなことを言うクロケルに若干の苛立ちいらだを覚えつつも、詩愛はどこかを目指して歩いていく姉を追走し。

やがて姉と思しき彼女は黒髪をなびかせながら、街のはずれの低層廢ビルへと吸い込ま

れるように入ってしまった。

「こんなところに彼女は何をしに行くんだい？　なんだか嫌な予感が……あつ、詩愛！」
すでに取り壊しが決まっているビルで、テナントも一軒も入っていない。

明らかに入る意味のない建物に入ってしまった冥愛らしき人物を追って、詩愛もためらわず中へ入っていく。

そして、ついに彼女の姿を捉えて叫んだ。

「お姉ちゃん！」

「……詩愛？」

廢ビル二階の何もない空間に佇む黒髪たたずの美しい女性。

彼女は声をかけられ振り向くと、そこに詩愛の探し求めていた姉の顔があった。

腰までの長い黒髪に、落ち着いた感じを漂わせる大人の女性としての美貌。

六年経っていても一目で分かる、最愛の実姉。

「お……お姉ちゃああん！」

感極まった詩愛は姉のもとへ駆け寄っていくと、冥愛は腕を広げて妹を抱き返した。

「お姉ちゃん……やっぱりお姉ちゃんだあ」

「詩愛……まだこの町に残っていたのね。それに大きくなって……お姉ちゃん、嬉しいわ」

「うん、うん……お姉ちゃんが帰ってくるときに迷わないように、わたしずっとあの家にいたんだから」

涙で前が見えない。

六年もの間、無事を信じて戦いながら待ち続けた最愛の姉が今、自分の目の前にいるのだ。

姉の体温、声、身体の柔らかさを感じながら、詩愛は子どもの頃のように冥愛に甘える。
「うう……お姉ちゃあああん」

「もう、大きくなっても甘えたがりなのは変わらないの……って、あら？ クロケル」
抱き着く妹の背を優しくさすってあやす冥愛だったが、ふと少女の横にフワフワと浮いている生き物がいることに気づく。

詩愛の使い魔であり、一般人には見ることでできない存在を。

それを見て、冥愛は瞬時に悟ったようだった。

「そう、あのあと契約を破棄して詩愛と……なるほどね」

「久しぶりだね、冥愛。使い魔からの一方的な契約破棄は苦渋の決断だったけど、無事で何よりだ」

（そっか、クロはもともとお姉ちゃんの使い魔だから……見えてるのも当たり前かあ）



契約を解消していても、一度交わした冥愛にはクロケルが見えているのだらうと詩愛は納得する。

「同じ血が流れているものね。それじゃあ今は詩愛が私の代わりにこの街を守る魔法少女になったということなの……ふふっ、立派になったのね」

「いや、魔法少女としてはまだまだ冥愛に及ばないよ。なんなら君と再契約したいくらいさ」

「もー！ クロってばひどいよ！ 今日だってちゃんとやれたもん」

しばし、二人と一匹の和やかな会話が廃墟内で交わされる。

そうしてひと心地ついてから、詩愛はようやく不自然な点に気づく。

「……でも、なんでこんなボロボロのビルの中に入っていったの？」

あからさまな廢ビルで、打ち捨てられて何もなただ広いだけの空間に冥愛は何をしにやってきたのかと。

「なんでって？ ……ふふ、それはね——」

「っ、きやああっ！」

が、冥愛がその理由を言い終わる前に。

唐突に詩愛の脚が、何かに掬からめ捕られた。

子供の腕ほどもある太さに、ナメクジのようなヌルヌルした不快感。

(しょ、触手!? 魔人の……)

足先に絡みついた触手は、そのまま朝顔のツルのように詩愛の健康的に肉のついた脚を螺旋状に絡みつきながら上つてがっちりと下半身を掴み身体の自由を奪う。

その上で、冥愛は動けない詩愛へゆっくりと近づきながら言った。

「——ひとけ人氣のないところに、あなたを誘導したかったからよ」

「えっ……」

とたん、背後から汚い咆哮とともに何かが襲い掛かった。

それが魔人のものであると察知した時には、詩愛は上半身もタコのような触手に掬め捕られてしまう。

「ふふっ、後ろがガラ空きなんだから。魔人の気配にも気づけないほどお姉ちゃんに夢中だったのね？」

そしてそのさまを見た姉は、さも嬉しそうに暗い笑みを湛え胸の前で手を組む。

「くっ、うう……」

「無駄無駄。俺の触手に捕まったら魔法少女だって抜け出せないぜ、なあメア様？」

醜い顔で触手を操る魔人は、年若い少女の全身をねちっこく締め上げて下劣な笑みを浮

かべる。

力は強く、身をよじつても撓たわみすらしない。クロケルが必死に触手に噛みついて引っ張り、なんとか戒めを緩めようとするがそれも効果がない。

だがそれよりも詩愛を驚愕きょうがくさせたのは、この魔人と冥愛が共謀しているかのようなやり取りを見せたことだ。

。実の姉が、魔法少女であつたはずの彼女が、どうして魔人などと結託してこのような

「ど、どうして……!! どうしてなの、お姉ちゃん……っ」

「冥愛! どうして詩愛にこんなことするんだい!」

一人と一匹が詰問するも、黒髪美女は表情を崩さない。

それどころか異様に滑らかな口調で、滔々と語り出す。

「お姉ちゃん、ずっと見てたわ。詩愛が魔法少女になつたのも、今日まで魔人を倒してきたのも、学園で頑張つて勉強と部活に打ち込んでいるのも、詩愛が朝起きてから夜眠るまで毎日毎日ずつとずつと一番近くで見っていたのよ」

「な、なに言つてるの……? お姉ちゃんは六年も前にいなくなつたのに」

「それでようやく準備が整つたの。詩愛をお姉ちゃんのものにするための準備が、その身

体が大きくなって快樂が芽生え始めたこの時を……うふふふっ」

妹たちの疑問に答えていないし、会話も成立していない。

正気を失った瞳で、延々と一方的に語り続ける冥愛に、詩愛は彼女が自分の姉ではない別の何かではないのかとすら思ってしまう。

「胸もお尻も大きくなって、女らしい身体になって……男子のいやらしい視線に気づいて身体が熱くなったり、オナニー覚えて眠れない夜にくちゅくちゅしたりしたでしょ？　そういう性徴の兆しこそ、詩愛がお姉ちゃんのものになる準備を整えた証……だからこうしてこつちも準備を終わらせて、詩愛のことを食べちゃいに来たの……ふふっ」

「な、なに言ってるの、おかしいよ！　お姉ちゃん、どうしちゃったの？」

目の前で拘束された妹に冥愛はゆつくりと手を伸ばし、その身体に触れる。

明らかに正気でない濁った赤色の瞳をきらめかせ、細い指で妹の発育途上の肢体を撫でまわしていく冥愛。

「ああ詩愛……可愛いわ、またこの手で触れる日をずっと楽しみにして……」

だがふと、彼女の指と言葉が止まる。

今なお妹の身体にまとわりついて彼女の動きを止めていた触手使いの魔人の存在に気づき、そこで露骨に美貌を憎悪に歪め。

「あら？ なにかしら、この——汚物は」

次の瞬間、氷のような声とともに彼女は詩愛へ向けた指先から黒い稲光のようなものを放って触手だけを焼き焦がした。

腕がちぎられた痛みで悲鳴を上げ、転げまわる触手魔人。

「グエエエ……！ め、メア様、な、なんで……」

「それはこつちのセリフよ？ どうして汚い触手で、汚い手で、私の可愛い可愛い妹に触っているのかしら？ ねえ？」

彼女の手にはいつの間にか、ドス黒い魔力を放つステッキのようなものが握られている。その先端から魔力の刃が形成され、園芸で使う鎌のような形状となり、冥愛は倒れている触手魔人に何事か淡々と言いながら、何度も何度もその刃を振り下ろす。

「ダメねえ、大事な妹に汚い触手で触って。死ななきゃね。死なないといけないわよね？ だって私の大切な、大切な宝物を汚したんだもの。そんな許されないことしておいて、生きていられるはずないでしょう？ ほら、死になさい。死になさい。早く死になさい？ 死、に、な、さい？」

「……………」

詩愛とクロケルは、そのさまを呆然と見ていることしかできなかった。

やがて魔人は悲鳴すら上げられなくなり、ただなされるがままに斬られ刺され、とうとう動かなくなつた。

あまりの残虐無道ぶりに、絶句してしまふ詩愛。

彼女の心情を代弁するかのように、クロケルが口を開く。

「冥愛、君と魔人の会話から察するにコレは君が従えていた手駒だったはず……それをあんな不条理な理由で残虐に殺すなんて……」

自分で詩愛を捕らえるように命じてここまで誘導しておきながら、いざ捕らえたら理不尽に虐殺する。

明らかに精神が異常で、そこに詩愛が抱いていたかつての優しい姉の姿は欠片もない。

「魔人を殺したら、当然魔力封印で元の人間に戻すこともできない。魔法少女の使命に悖る残忍な行為だ。冥愛、君はいつたいていどうしてしまつたんだ？ ボクとの契約を破棄してから何があつたんだい？」

「うふふふ……私は何も変わっていないわクロケル。妹が好きで、大好きで、詩愛のためなら何でもしてあげるお姉ちゃん……それが私、音羽冥愛。そうでしょう？」

（どうして、どうしてどうして!! なんでこんなことに、何が起こつてるの!! わかんない、もうわかんないよ!）

いくら六年も生死をかけて戦ってきたとはいえ、詩愛はまだ十代の若い少女。

不測の事態に耐えられるほど精神は強くなく、触手から解放されても混乱と動揺で依然として身動きが取れない。

そんなとき、横でクロケルが重々しく言う。

「……詩愛、きつと冥愛は長きにわたる戦いと消息不明の期間を経て、体内の『魔』が穢れて魔法少女から魔人になりかけているんだ。行動や考えがおかしいのはそのせいに違いない」

「そ、そんな！ どうしたらいいの!?!」

「戦うしかない。戦って冥愛を倒して、魔力封印で正気に戻すんだ」

その一つしかない選択肢は、詩愛にとつて重くのしかかるものだった。

魔法少女として、ようやく会えた姉と戦うなど。

しかし、それ以外に方法が見当たらない。

「……わかったよ。わたしがお姉ちゃんを元に戻すからっ!」

相棒の助言でやるべきことを見出した詩愛は、姉を振り払って距離を取り。

自らを眩い光で包み、可憐なコスチューム姿になり自分を囲う魔法のフープを両手で掴んで構える。

「魔力解放！ 魔法少女シア、参上っ！」

「ふふっ、詩愛の魔力解放……この目で見るとやっぱり可愛いわ、私の最愛の妹の変身姿……でも、私と戦おうなんて、お姉ちゃんに盾つこうなんて、お姉ちゃんそんな詩愛知らないなあ。お姉ちゃんに逆らう悪い詩愛はお仕置きしなきゃ……うふふふ、そうよね詩愛、だからちよつとだけ、ちよつとだけ痛くしちゃうわよ……あはははははっ」

異様なほど滑らかな口調とともに冥愛の身体をドス黒い光が包んでいき、彼女の豊満な肉体が一瞬だけあらわになってすぐにコスチュームがそれを包む。

「ふふふ……魔力、解放！ 魔法少女メア、現前！^{げんぜん} あははははは！」
当然というべきなのか、冥愛もまた魔力を解放して魔法少女に変身する。

豊満な肢体を面積の少ない妖艶な黒い布で覆い、黒髪には赤が混じって濁った血を思わせる禍々しい色に変貌^{へんぼう}した。

手に持っていた小さな鎌はみるみる巨大化し、漫画などで死神が持っているような大鎌へと変貌する。

さつきは変身前ということとで小型だったが、こちらが魔力解放に伴い本来の形になった魔法少女メアとしての武器なのだろうとシアは肌で理解する。

「お姉ちゃんと戦うなんて……でもこれもお姉ちゃんの中の悪い『魔』のせいなんだ：

…!

おぞましいほどの魔力の奔流^{ほんりゅう}。

とても自分の力でなんとかなる気はしないが。

「待っててお姉ちゃん、すぐ元に戻してあげるから！」

「うふふ、あははははは！ 悪い子ねえ詩愛、いいえ魔法少女シア……お姉ちゃん、ちよ

——っぴり怒っちゃったわよお……！」

戦うしか、ない。

自分の力で、この不気味に笑う姉を正気に戻すのだ。

シアは大きく後ろに飛ぶと、フープを振り抜いて何本ものビームを飛ばす。

それらは立て続けに命中し、魔ビルを揺るがすほどの打撃を与えるが。

「ふふっ……この程度なの？ お姉ちゃん、がっかりだなあ。大口叩いておきながらこん

な威力の魔法しか出せないの？ お姉ちゃんを失望させないで、お姉ちゃんに成長したと

ころ見せてえ？ あはは、あははははは！」

（う……全然効いてない！）

光は大鎌で容易^{たやす}く弾かれ、メアにはまるで効いた様子がない。

「ためらっちゃダメだシア！ 本気でやらないとメアは救えない！」

「わ、わかってる！」

どうしても姉に対しての攻撃ということで手加減してしまうが、クロケルはそれを強く諫める。

のっぴきならない状況だ。

「魔力……最大解放！」

迷いを断ち切ったシアはフープからスッと手を離して、円の中に姉の姿を入れるように空中へ留め置き。

ありつたけの魔力をそこに込め、極太のビームを一直線に放つ。

「いっ……けええええっ！」

「よし、直撃だ！」

轟音とともにメアの背後の壁に穴が開き、そこから光が外まで飛んでいく。

実の姉を貫通するほどの威力だが、これならメアも無事では済まない。

（待っててお姉ちゃん、いま魔力封印で助け……）

「それで本気？ それで全力なの？」

が、迂闊うかつに歩み寄ろうとしたシアの動きが止まる。

煙の向こうから、氷のように冷たい姉の声がして。

「分らない妹には――」

「シア、上だ！」

「――お・し・お・お・き！」

次の瞬間、彼女の真上から無傷の姉が大鎌を振り下ろしていて。

（お姉……ちゃん……）

シアの意識は、そこで途切れた。

「……ア！ シア！ 詩愛っ！」

「う……」

聞き知った相棒の声が、少女を意識の闇から引き上げる。

詩愛が目を開くと、そこにはクロケルが心配そうな顔で自分を覗き込んでいた。

知らない間に変身が解け、学生服姿に戻っている。

「よかった、気がついたみたいだね。しかし困ったことになった」

（わ、わたし……確か……）

ぼんやりする頭を必死に回し、記憶を手繰り寄せようとする。

六年越しに再会した姉がまともでなくなっていて。

戦って彼女を正気に戻そうとして。

そして――。

「目が覚めたかしら？ 私の可愛い可愛い詩愛、うふふふ……」

「お、お姉ちゃん!？」

最愛の姉の、声がする。

ここは先ほどまでの廃ビルとは違うようだ。

よく見れば見知った家具に見知った造り。

そうして、意識がクリアになってきた詩愛は気づく。

(ここ……お姉ちゃんの部屋)

詩愛の家であり、冥愛の家でもある自宅。

そのうちの一部屋、長期間空き部屋となっていた冥愛の部屋のベッドに自分は寝かされていたのだと。

「私がない間も掃除してくれてたのねえ。ホコリ一つ落ちてなくて、お姉ちゃん感激しちゃった。本当にできた妹、自慢の妹……ふふっ」

そうして六年越しに帰ってきた部屋の主は、不在の間も手入れを欠かさなかった律儀な妹に目を細めて微笑む。

「お姉ちゃん、説明してっ！ どうしてこんなことに……」

詩愛は語気を強めながらガバツと跳ね起き——することはできなかった。

手首と足首がナマコのような触手によつてベッドに固定され、またしても身動きの自由を奪われている。まるで昆虫の標本にでもされてしまったかのようなのだ。

「その触手は私の一部だから安心してね。お姉ちゃんにも触れている感触は伝わるんだあ。詩愛の細い手首と足首、ちよつと力を入れたら折れちゃいそうな危うい場所を、ギュッと押さえて身動きを封じるこの感覚……私のもものになった感じを味わえるのよねえ」

相変わらず一方的な物言いに、詩愛は目覚めたばかりだというのに目の前が暗くなる。先ほどの一連の流れは夢でもなんでもなく、再会できた姉はすっかり狂ってしまつていくという現実を改めて直視することとなった。

「ごめん、詩愛。ボクにはどうすることもできなかつた。メアはボクの魔力さえ抑え込んでしまうほどに増長しているみたいだ」

そばでクロケルが申し訳なさそうに言う。よく見ると彼は黒く輝く魔力のヒモのようなものに掬め捕られ、空中で身動きが取れない状態にある。

唯一助けになつてくれそうな使い魔でさえ、メアの魔力の前には為す術がなかつたらしい。結果としてこうして詩愛ともども捕らわれている。

冥愛はベッド上にはりつけに磔にされた妹にゆっくり覆いかぶさると、ひとときわ邪悪な笑みを浮かべて言った。

「さあ、六年も触れなかった大切な妹の身体……この触手でいっぱい、余すところなく触つてあげる……うふふつ」

「ひ……きゃあああ！」

姉の部屋に妹の悲鳴が響く。

見る見るうちに冥愛の下半身が変形し、質量保存の法則はどこへ行ったと言わんばかりの無数の触手となる。

上半身は人間のまま、下半身は巨大なイカのごとく触手の集合体になった冥愛。

太さや長さは様々だが、黒紫色のグロテスクなデザインの触手それらをウネウネと動かしながら微笑む姉はさながら半魔人とも言うべき面妖さを放っていた。

そうして冥愛——魔法少女となったメアは触手を二本伸ばして、組み敷いた妹の頬にペトリと触れながら言う。

「ほおら、お姉ちゃんとちゅー、しようねえ」

「やつ、やだつ、やだあ！ 来ないでつ、やだああ！」

触手が詩愛の両頬をがっちりと押さえ、メアの唇がゆっくりと迫ってくる。

恐怖でしかない姉との接吻に、詩愛は半泣きになつて首を振り拒もうとした。

その振る舞いにメアはムツとする。

「どうして嫌がるの？ 詩愛、昔はお姉ちゃんのほっぺにいつぱいちゅーしてくれただしよ？ お姉ちゃんもお返しにおでこやほっぺにちゅーしたら、詩愛は嬉しそうに笑つてくれたじゃない。お姉ちゃん大好きって言つてくれたでしょ？ あれは嘘だったの？ 嘘じゃない、詩愛は嘘つくような悪い子じゃないの。だからほら、キス……しましょう」
確かにそんな記憶もあるが、それとこれとはまるで違う。

純粹に大好きだった姉に姉妹愛の証として自分からするものと、今こうして狂つた姉にのしかかれて無理やり奪われる唇とでは本質から異なるのだ。

それに詩愛とて成長に伴い女の子らしい健全な思考が宿っており、間違つてもファーストキスを実の姉と交わす気はない。

あくまで血を分けた姉妹として大好きなのであり、恋愛感情や性的欲求を実姉に抱くなどどうかしている。

「待つて、お姉ちゃん、おねが——んんむううううっ！」

「んっむうううう！ んぶじゅるるるるるっ、じゅぞんぶっじゅるうううっ！」

懇願しようとしたその口を、とうとう姉の口がふさぎ。

次の瞬間、物凄い勢いで妹の口腔内はメアによつて蹂躪され尽くす。

(やだっ、やだああ！　こんな……こんなファーストキスっ、おかしいよお……！)
狂気に取りつかれ暴走してしまつた姉による、一方的に押しつけられた歪んだ愛情。

のしかかられ、頬をpushさえつけられ、逃げ場のない状況でそれをまともに浴びせられ、詩愛の幼い精神はあつという間に許容量の限界にきてしまう。

だというのにメアは延々と口吸いをやめず、それどころか舌を伸ばして妹のそれと執拗にねちっこく絡ませ始めた。

「じゅるるるっ、んれるっ、んむっべるるえ、はんむっ……ぶじゅるるるるっ、んれるれれれっ……んむうううっ！」

さらなる激しいキスが詩愛の心身を蝕み、そしてなぜか詩愛の身体は徐々に抵抗を弱めていく。

嫌なはずなのに、撥ね除けたいのに、力が抜けてなされるがままにされてしまう。そうして、永遠に続くかと思われた姉妹の淫らなキスが終わり。

メアが唇を離すと、詩愛はぐつたりと仰向けになつて荒い息を吐いていた。頬は紅潮し目は焦点を合わせられず、雌の顔と表現すべき表情で。

「んっはああ……妹のファーストキスを奪えて、詩愛といっぱいちゅーできて、お姉ちゃ

ん嬉しいわあ。詩愛も嬉しかった？　そうよね、お姉ちゃんとキスできて喜ばない妹なんかないもの。だから詩愛も嬉しいの。詩愛もお姉ちゃんとずつとちゅーしたかったのよね、お姉ちゃんちゃんんと分かっているからねえ。うふふつ、ふふふふ……」

勝手に奪っておいて勝手に相手も求めていたかのように決めつけ、勝手に悦に入る狂気の姉。だが詩愛は反論することもできず、ベッド上で育ちざかりの胸を激しく上下させながら喘ぐのが精いっぱいだった。

それに、どうもおかしい。

(か、からだか……あつい……)

全身が火照って、甘く疼くのだ。

キスをされただけでこうなるのかと思いきや、姉の口からとんでもない事実が露見する。「ふふつ、お姉ちゃんの唾液、美味しかった？　女の子を……いいえ、詩愛を気持ちよくさせる魔力をたっぷりと含んだよだれをあれだけ飲んだら、もうすつかりトロトロねえ」

「……………」

「く……やっぱり君は魔人に近づいているようだね。唾液が魔人の体液と同じ効果を及ぼすなんて……詩愛、何とかして逃れないとこのままじゃ……」

クロケルは苦い顔で分析するが、とても逃げられる気がしない。

激しいキスによる倦怠感と、初めての唇を奪われた虚無感と、流し込まれた発情唾液によつて全身が弛緩し動くことすら億劫^{おっくう}だし、四肢は相変わらずメアの一部である触手に捕らえられている。

けれどこれ以上、この頭のおかしい姉に付き合つてはいられない。どうにか逃げようとするのだが、できることは頭を横に振つて身をわずかによじらせる程度だ。

姐上^{せじょう}の魚よろしく、詩愛はこれから実の姉によつて好き放題されてしまう。

「さあ、お姉ちゃんがたっぷり可愛がつてあげるからねえ」

「ひっ……！」

クロケルはメアが魔人になりかけていると言つたが、もはや魔人そのものように詩愛には思えた。

自在に肉体を変化させ、下半身を無数の触手に変えて自分を犯そうとする彼女を魔人と言わずになんと呼べばいい。

今までの魔人も、そうやって詩愛を犯そうとしてきたのだ。

もちろんこれまではなんとか撃破して少女の純潔は守られてきたが、事ここに至つてはどうなつてしまうか分からない。

ヌトヌトと粘液できらめいている太い触手が、何本も詩愛の全身を制服越しに撫でまわ

していく。妙に温かくて気持ち悪い。

「やつ……やめ、てえ……!」

「敏感なのねえ詩愛は。私がちよつと撫でてあげただけでそんなに可愛い反応しちゃつて。お姉ちゃんも責め甲斐があるわあ。ほら、こんな邪魔な服なんか取っちゃおうねえ」

何本もの触手が、学生服のブラウス、その中央に集まっていき。

一気に左右へ動き、ボタンを引きちぎって未成熟な中等部生のきめ細かい肌をあらわにする。あつという間に詩愛の上半身はスポーツブラのみにされてしまい、思わず甲高い悲鳴を上げたがメアはお構いなしに触手で少女の腋や腹を直接撫でまわしていく。

「い、いやあ……気持ち悪いっ、怖いっ……」

手で触れられているのとは違う、ナメクジに這はいまわられているかのような嫌悪感。

人間はもともと、ヌルヌルしたものを本能的に忌避するきらいがある。ましてそれが自分を犯すために這いまわっているとなればなおさらだ。

触手が這った後はヌトヌトした粘液が残り、気持ち悪いことこの上ない。

「やだあ……やめて、もう許して、お姉ちゃん……」

「もう、どうしてそんなに嫌がるの？ お姉ちゃんの触手ては嫌い？」

早くも弱音を吐き始めた魔法少女に、メアは無数の「手」で実妹を弄もてあそびながら言う。

「小さい頃は毎日お姉ちゃんと一緒にお風呂に入って、お姉ちゃんに身体を隅々まで洗ってもらったでしょう？ 嬉しいでしょう？ 嬉しいの。詩愛はお姉ちゃんに身体をまさぐられると嬉しいの、お姉ちゃん分かってるから大丈夫、ね？」

二度目だが、それとこれとは全然違うのだ。

いま目の前にいるのは姉の姿をした別の何かで、身体をまさぐっているのも不気味な触手なのだ。これで嬉しいと感じる方がおかしい。

「詩愛の身体を洗ってるときは本当に幸せだったわあ。まだちっちゃな詩愛の全身を、恥ずかしいとこまで隅々まで綺麗にしてあげて……あの時からずっと、この身体に触れているのはお姉ちゃんだけ。私だけなのよ詩愛……ふふっ」

（お姉ちゃん……）

その頃から彼女は、自分に歪んだ思いを抱いていたのだろうか。

だとすればメアの狂愛は地続きのもので、簡単には元に戻せないのでは——そんな悪い予感が詩愛を蝕んでいく。

「今こうして同じようにいろんなとこ撫でまわして本当に嬉しい。胸もだいぶ大きくなつたわねえ、ほらこんなに」

「やつ、やだつ、そんなとこ……！」

細い触手が少女の上半身、その最も敏感な部分を守る布地へゆつくりと迫り寄る。

色気よりも機能性を重視した飾り気のない水色のスポーツブラが簡単に外れ、ひどく敏感な少女の発達途上バストがあらわになる。

「ひゃっ、いやああっ！」

「可愛いおっぱい……詩愛らしくて本当に素敵。これからもっと大きくなりそう」

詩愛くらいの年頃の女の子は非常に難しく、高等部生くらいになれば同性間であれば裸を見られることに抵抗も薄れてくるが、人生で最も多感な時期である彼女の場合はそうはいかない。

加えて目の前の姉は正気を失っており、何をしてくるか分からないのだ。

恐怖と羞恥に耐えられず、さりとて腕と脚は触手で動かせないため詩愛は真っ赤になってわずかに身をよじるだけの抵抗を試みるが、メアの前では何の意味もなさない。

中等部生にしては発育の良い八十四センチの成長中バストを二本の触手で包むように撫でまわされ、少女の敏感な雌の柔肉が熱を帯びて反応してしまう。

「あっ、はあっ、やだっ、やめっ……んんんっ！」

「ここ一年で急に成長したのよね？ ブラも去年はCだったのに、今はEカップだったかしらっ？」

「な、なんで、知って……」

「お姉ちゃんは何でも知ってるの。時々自分でおっぱい揉んで気持ちよくなってることなんかも……ね」

身体の変化が同じ学年の女子の中でも割と早熟だった詩愛は、そのぶん性の芽生えも早かった。膨らんできた胸をひそかに触って甘い刺激を得たり、恐る恐る股の裂け目に指を這わせると身が震えるほどの快感の波が襲ってきて、こんなこととしてはいけないと思いつつも指の動きを止められなかったりしたことも一回や二回ではなかった。

しかしそれをどうして行方不明だった彼女が知っているのだろうと、詩愛は混乱しながらも考えるが。

その間もメアの触手責めは終わらず、少女の発育途上のEカップを揉みほぐす。

「んんっ、んうっ、やめ、へっ……」

「クラス男子に胸のことをヒソヒソ話されて、嫌なのになんだか不思議な気持ちになっちゃったりするんでしょう……？ 自分が女として見られているんだってことに無自覚ながら喜んじやってるのよねえ……エッチな詩愛」

螺旋を描くようにして乳房全体を包み込み、その上で全方向からの優しい愛撫。人間の手に揉まれるものよりもはるかに刺激の強い触手胸揉みに、姉以外に肌を晒したことのな

い少女が耐えられるはずもない。

「ち、ちがうつ、そんなことないっ……んああっ！」

「もう、そんなに邪険にしないで、お姉ちゃん傷ついちゃうわあ。一緒にお風呂に入ってた時なんか、お姉ちゃんのおっぱいおっきいなんて言って揉んでくれてたこともあったのに。いいのよ、あの頃みたいに揉んだって。ほら」

それは当時の詩愛にはまだそういうことが分かっておらず、母親を早くに亡くした自分は単に姉の大きな乳房に母親像を見ていただけに過ぎない。

だというのにメアにはまったく通じず、一方的に結論づけて別に揉みたくない胸を揉んでもいいよと言ってくる。

まだ人間のままの上半身のコスチュームを、触手を使って左右に大きくずらして豊満な爆乳をあらわにするメア。

百センチを超すバストは同性であっても、実の妹であっても目を引いてしまう暴力的ですらあるものだった。

「ほら、お姉ちゃんのおっぱい。詩愛のおっぱいを揉んでいいのがお姉ちゃんだけなように、お姉ちゃんのおっぱいも揉んでいいのは詩愛だけなのよ？」

そのようなことはこんな状況で欠片も望んでいないにもかかわらず、メアは一方的に自

分の百センチ超えバストを詩愛の乳房へむにゆううつ！ と上から押しつけていく。

「ほおら、おっぱい押しつけあって、一緒におっぱいでイキましよう？ んんっ、気持ちいいっ、詩愛の可愛らしいおっぱいが私のおっぱいに押されてっ……ああっ、いいっ！」

大ききの違う四つの乳肉が押しあい歪み、四つの乳首が躍りまわる。

色素の沈着もない薄ピンクの小さな乳首が姉の大ぶりなそれとこすれるたび、敏感少女は「んんっ……！」と身を震わせ、触れあつた胸から伝わるその振動に冥愛は妹が性感を覚えていゝるさまを感じ取り悦に入る。

「ふふっ、詩愛は乳首がこすれるのがいいのね。だったらもつと、ほらお姉ちゃんの乳首とこすりあわせてっ……」

「やつ、やめ、おねえ、ちゃんっ、んんっ、それだめっ、変に、変になっちゃうううう！」
敏感すぎる桜色の乳頭を姉乳首が執拗にこね回す。必死に逃げようとしても何本もの触手が詩愛の身体をがっちりとホールドしているため、メアの押しつけてくる乳房と乳首からは逃れられない。

結果として、乳首のこすれあいによる快感が一切軽減できずに延々と脳へ送り込まれる。逃げ場のない姉妹レズによるあつてはならない快楽を流し込まれ、幼い少女の脳はオーバーヒート寸前だ。

(きもちいいっ、おっぱい気持ちいい！ ダメっ、こんなので感じちゃダメなのにつ、気持ちいいの抑えられないっ……)

なんとか声を殺して耐えようとすると、稚い少女の抵抗など完全に読み取られているよ
うでメアはさらに容赦なく自らの乳房を押しつけ強引に快楽でねじ伏せようとする。

「ほら、素直になって、おっぱいでイっちゃいなさい詩愛。んんっ、私もイキそう、お姉ちゃん、おっぱいでイキそう……詩愛も、ほら、イって……!」

「だ、だめっ、それ、おっぱいっ、むりやりっ、やだっ、だめええ!」

子どもだましのような稚拙な自慰で胸を揉んだ時に感じることはあっても、そこで絶頂することなどなかったはずのあり得ない快楽が、発達途上乳房の中に渦巻いて弾けそうだ。延々と乳内に送り込まれる性的快楽に耐えきれず、とうとう詩愛は未体験の胸絶頂を味わってしまった。

「やだっ、へんっ、おっぱい変になってっ、きちゃう、きちゃううう! お姉ちゃん、お姉ちゃあああん! んあっ、あっ、あはあああ——!」

「んああっ、詩愛、詩愛あ……お姉ちゃんもおっぱいで、おっぱいでイクっ、詩愛といっしょにおっぱいイっ、くうう……っ!」

びくんっ! びくびくっ、びくんっ!



四つの乳房が同時に跳ねまわり、魔法少女姉妹は共に胸のみで絶頂し互いの身体が強く痙攣する。

こんなふうを感じ絶頂できることなど、経験不足の詩愛は知らなかった。

それも姉妹レズによる禁忌的な行いで達してしまったということも、十代の少女には容量過多な快感となつていつまでも後を引く。

「はあつ、はあ……わ、わたし……胸で、おっぱいで、気持ちよくなっちゃつ……たあ……」

「……ふふつ、とつても可愛かったわ、初めて胸イキしちゃう詩愛。お姉ちゃんも久しぶりに本気イキしちゃった、詩愛を見ながら毎日オナニーしていたのとはやっぱり違うわあ」
メアが何か言っていたが、今の詩愛にはよく聞き取れない。

恍惚こうこつとしてしていると、先に絶頂から立ち直ったメアがさらなる姉妹レズプレイを続行させんと下半身の触手を伸ばしてくる。

「ふふつ、次はこつち……」

「……ふえっ!? や、やだつ、そこはっ……」

姉の触手が下半身へ伸びていることに気づいた詩愛は慌てて股間を隠そうとするも、手首は別の触手によってベッドに固定されているためどうすることもできない。

スカートが脱がされ、飾り気のないショーツがあらわになる。

とうとう布一枚になってしまい、これを取り去られたら完全に無防備になってしまう。

「あらあら、可愛らしいの穿いて。けどブラと色を揃えているあたり、ちよつとは大人になりかけてきたかしら？ お姉ちゃん嬉しいなあ」

「や、やだつ、パンツ見ないでえ……」

これまた色気よりも清潔感や機能性を重視したショーツ。中等部生らしい健全なデザインで、それが逆にメアの興奮を煽り触手をウネウネと動かせる。

「あら？ もうここにシミができちゃってる。さっきの胸だけでいったのが、そんなに気持ちよかつたのねえ」

「っ……！」

敏感な成長中乳をまさぐられて、押しつけあいによって絶頂し、それにより幼い割れ目からはクロツチ越しに沁みてくるほどの淫蜜を吐き出してしまっていた。それを目ざとく看破され、詩愛は死にたいほどの恥じらいに苛まれる。

「お姉ちゃんにおっぱい揉まれただけでおまんこ濡らしちゃう、エッチで恥ずかしい妹の詩愛には、しっかりお姉ちゃんが性教育してあげないといけないわよねえ？」

「や、やだつ、そんなのいいつ、お願いだからこれ以上変なことしないでえ……」

しかし、狂った姉に妹の懇願など通らない。

触手がショーツの縁を掴み、左右同時にずり下げて女の子の一番恥ずかしい部分を外気に晒させる。

「いやあつ……恥ずかしい、死んじゃう、恥ずかしくて死んじゃうよ……」

真つ赤になって泣きながら、今までの人生で一番の羞恥心に身を焦がされる魔法少女。

しかしその一方で、たまらなく身体は火照り今まで味わったことのない興奮も詩愛は覚えていた。

「きれい……詩愛のここ、割れ目もぴっちり閉じて、誰にも侵入を許さずお姉ちゃんのために操みさおを守ってくれていたのね……お姉ちゃん嬉しい、嬉しいわあ」

「ひん……っ」

冥愛はそう言いながら妹の一本スジをゆつくりとなぞり、全裸魔法少女はその甘い快樂に身を震わせる。

（こ、こんなところ、お姉ちゃんに触られて……わたし、恥ずかしいし怖いのにっ、気持ちよくなっちゃってる……）

きつと最初のキスで流し込まれた発情唾液のせいだと考え、これは一時的なものだと言い聞かせて懸命に耐えようとするが、メアの責めは丁寧かつ的確で容赦がなく、性的経験

が皆無な純朴妹を弄んでいく。

「ふふっ、ここ、いっぱい舐めてあげるね」

「ふえ!? ま、待って、お姉ちゃ……はあああんっ!」

狂気に熱を帯びる姉の舌が、幼い少女の秘裂を舐^{ねぶ}つていく。

舌先で妹の隙間に潜り込み、本人の意思と無関係にあふれる淫蜜を啜^{ねぶ}り喉を鳴らして飲み込む。

「んふっ……詩愛のおまんこ、エッチなお汁……お姉ちゃんのために作られた蜜、とっても美味しくて幸せになっちゃうわあ……」

「や、やめっ、お姉ちゃんっ、そんなところ……汚いっ……」

「なに言ってるの、詩愛の身体に汚いところなんか無いわ。だって詩愛はこの世で一番きれいで、汚されてはいけないお姉ちゃんの宝物だもの……んじゆるっ」

「それ以上はやめるんだメア! 今すぐ詩愛を離し……うああっ!」

クロケルが我慢できずに叫ぶも、彼を拘束する魔力のヒモがバチバチと音を立てて発光し、電気を流されたかのように使い魔は悶絶して床に倒れる。

「く、クロっ! んんっ、んあああ——っ!」

「あんなのの心配しなくてもいいのよ? お姉ちゃんと気持ちいいことだけ考えて、ね?」

相棒の身を案じることさえ、襲い来る快樂は許さない。

これ以上姉によってイカされてしまえば、どうなるか考えただけでも恐ろしいのに止められない。

（や、やだっ、また、よだれ……流し、込まれてっ……これじゃあまた気持ちよくなっちゃうっ、アソコっ、わたしのアソコ、イッチャうよお……！）

「じゅるるっ、んれるっ、っはんむっちゅ、んっぷあ……詩愛っ、詩愛……！ んぶっじゅずりゅるるるっ！」

「やだっ、おねえ、ちゃ……んはあっ、はああんっ！」

愛液は吸われ、代わりに唾液を流し込まれる。

互いの体液を送りあう過程で、妹は強制発情し姉は心が満たされて。

禁断の姉妹レズ体液交換によって、魔法少女たちは二人揃って高まってゆく。

「……ほら、最後は触手でいっぱい触ってあげる……お姉ちゃんのよだれですっかり発情しちゃった、エッチでいけない処女おまんこ……イかせてあげる」

存分に妹の汁を啜ったメアは満足そうに詩愛の秘所から口を離すと、手の甲で口を拭い、つつ下半身の触手をそこへ向けていく。

それと同時に四肢をつなぎ留めていた触手拘束を解き、下半身の複数の触手で詩愛を搦

め取り抱き上げて姉妹はベッド上で絡みあったまま対面する格好になる。

「ふああ……やだっ、もうやめっ、やめへえええ……」

どうにか触手責めから逃れようと試みるも、すでに身体に力は入らず下半身が疼いて止まらない。

期待してしまっている。

あの気持ち悪いヌラヌラした触手に、敏感になったところをまさぐられて先ほどのように絶頂してしまいたいと。

あの味をもう一度堪能したいと、幼さの残る少女の肉体が求めてしまう。

「大丈夫、処女を奪ったりなんかしないわ。今は……ね。大切な宝物を、少しでも長く未開封のまま、未使用のまま愛でてあげたいの」

正気と光を失った、赤黒く濁る姉の瞳。その中には怯える妹の顔しか映っていない。

詩愛はそれを見て、姉という牢獄に囚われ出てこれない自分を想起した。

最愛の存在だったはずの姉から、決して逃げられないと――。

「ほおら、詩愛の身体じゅう全部、お姉ちゃんが愛してあげる……」

「ひっ、やだっ、おねがい、お姉ちゃんっ……!!」

ぐちゅぐちゅ、ぬるにゆるるっ、ぬっちゅぬっちゅっ!

「ああ、詩愛……ここも、ここも、全部、ぜんぶお姉ちゃんのもの、ゼーんぶ私
のものなの……っ！ 詩愛、好きよ、ずっと、ずっと、あなたが生まれた時から、ずっと
お姉ちゃんは詩愛のこと見ていたんだからねっ……お姉ちゃんが一番長く、一番深く詩愛
を愛しているの、他の誰よりも詩愛のことを愛しているの、だから詩愛は私の、お姉ちゃ
んのものにならなきゃおかしいの！ ああ、詩愛、詩愛……！」

ひたすら一方的で、独善的で、恣意的な感情を吐露しつつ、触手による全身の愛撫を絶
えず妹に行い快樂を与え、貪り続ける。

一方で詩愛はそんなメアの狂った思いとともに撫でまわされ、揉みほぐされ、まさぐら
れる触手快感に抗えず、荒い息を吐きながらなんとか逃げようと試みるが、もがけばもが
くほど軟体腕が柔らかな肉体に沈み込んで可愛らしい声を上げてしまう。

触手がもたらす未知の快樂と、同性ゆえの容赦ない的確な責めが相乗効果をもたらし、
快樂慣れしていない敏感な少女を寄せては返す波のようにいともたやすく手玉に取る。

「あつ、あはあつ、ダメ、らめ、らめえええ！ おねえ、ちゃ、んんうっ、んんんっ！」

（ダメっ、気持ちよくなるっ、気持ちよくなっちゃうううう！ こんなのおかしいのにつ、
お姉ちゃんは魔のせいでおかしくなってるのにつ、わたし、お姉ちゃんの触手で気持ちよ
くなっちゃうてるのおおお！）

そんな妹の反応から、詩愛に絶頂が近づいていると悟ったメアはより一層触手の動きを速め、一気に快楽に墮とそうと責め立てる。

「イキそう？ イキそうなのね詩愛、お姉ちゃんの触手責めで全身気持ちよくなって、おまんこいっぱいイっちゃうのね？ いいわよほら、いつて、お姉ちゃんの触手うでの中でいつてええ……！」

「だめっ、だめだめだめ、ほんとにダメえ！ イっちゃう、アソコっ、きもちよくなってっ、んあっ、あはああ！」

「おまんこ、でしょう？ お姉ちゃんに詩愛の口から紡がれる恥ずかしくていやらしい言葉、聞かせて？ ほーら。お、ま、ん、こ……ふふっ」

恥じらいからか性器の直接的な呼称を口にしない詩愛に、メアは仄暗ほのぐらい笑みを湛えながら触手の動きを速め、一文字ずつゆつくりと妹の耳元でその言葉を刷り込んでいく。

「ああっ、おまんこ、おまんこおお！ おまんこ、おっぱいも、ああっ、ぜんぶ、ぜんぶいくつ、イっちゃうよおお！」

そしてそれをそのまま口に出し、ますます快楽のボルテージが上がってしまう詩愛。

逃げ道もなく、助けも来ず、耐えるしか選択肢のなかった魔法少女が絶頂に導かれることは定まっていた。

「ああつもうダメつ、お姉ちゃんつ、お姉ちゃああああんつ！ イクつ、イクつ、いつくううう——……！」

その運命のまま、無数の触手に弄ばれた詩愛は姉に抱き着きながら全身をビクビクつ！と波打たせ、ひとときわ高い声を上げる。

それと同時に、メアもまた妹を果てさせた悦びに心身が満たされ絶頂した。

「ああつ……出るっ、お姉ちゃんもイクつ、詩愛のイクとこ見て触手イっちゃう……浴びてっ、お姉ちゃんの体液全身で浴びてえええ！」

ぶびゅっ！ ぶばびゆるるっ、ぼぶびゆりゆりゅっ！

びゅばぶびゆるるるっ、どぼぶびゆりゆううっ！

「あはあああつ！ いった、イヤっ、いったばい、びゅつてえ……」

自分の全身を、胸を、性器を、尻を撫でまわす複数の触手の先端から、一斉にねばついた白濁液が噴射される。

熱くてドロドロの、男性の射精のような分泌液を全身に浴び、これもまた体液であるせいなのか詩愛は嫌悪感よりも不思議な快感でもってそれを受け止めてしまう。

触手の戒めから解放され、体液塗れまみの詩愛はべちゃりと力なくベッドに倒れた。

（こ、こんな……汚くて、臭くて、気持ち悪いはずなのに……お姉ちゃんの体液、欲し

がっっちゃつてるの……)

「あはあ……んっふ……お姉ちゃんも、いつちゃったあ……触手からエッチなミルク、いっぱい……」

「これは、魔人の体液だ……やはりメア、君は魔人へと変貌しつつある。このまま放っておくわけには……」

詩愛同様に触手から解放されたクロケルが、呆然と呟く。

魔人になりつつある魔法少女を救うには、詩愛が姉に打ち克つて魔力を封印する以外になかった。しかしその詩愛は戦いでも敗北し、今の姉妹レズレイブにおいても抵抗らしい抵抗さえできずいいように絶頂させられてしまっている。

状況は良くない。

いっぼうで、満足そうに触手を引つ込めていくメアは。

「ふふっ……いつちゃったのね、詩愛……お姉ちゃんの触手で、お姉ちゃんですべてくれたのね……」

妹を絶頂させたことによる高揚感で恍惚としつつ、ぐったりする詩愛に覆いかぶさったまま微笑み。

ひくひくと幼さの残る身体を痙攣けいれんさせる、自らの体液まみれの妹の下腹部に、妖しく輝

く光を灯した指を近づけていく。

指がひととき眩しく輝いたかと思えば、次の瞬間そこには不可思議な文様が刻まれていた。

ハートマークのようにも、蝶のようにも見える淫らな紋章が。

「ふえ……な、なに、これえ……」

「六年留守にしてたお土産。お姉ちゃんの所有物の証」

そうして置き土産を残したメアは、立ち上がって変身を解くと人間の姿に——音羽冥愛に戻って部屋を後にする。

詩愛と、元使い魔のクロケルを置き去りにして。

「また来るわ、今度は近いうちに……ふふっ」

六年ぶりに帰ってきた詩愛の姉、音羽冥愛。

彼女の妹へ向ける狂気の愛情は、まだ片鱗しか見せていない。

「じゃあ、おじさんたちとホテル……行こうか」

「はい……よろしくお願い、します……」

自分でも止められない性衝動のまま、中年二人に肩を抱かれてシアとクロケルは近場のラブホテルへ入っていく。

「わあ……おちんちん二本、どっちもおつきくて硬い……すつごく臭くて、熱くて……わたしの手の中でビクビク脈打って、精液いっぱい出してくれそう……」

「いやあ、痴女ってほんとにいるんだなあ。今日残業してよかった」

「チンポ両手に握って嬉しそうにしてさ、それもまだこんなに若い女の子が」

ホテルの一室で男二人は全裸になり、シアにたるんだ腹と雄の証を見せつける。

淫乱魔法少女はコスチューム姿のままそれらに手を伸ばし、両方の手で一本ずつ肉茎を握り込んで丹念にしごいていく。

「シアちゃんって言ったよね？ いつもこういうことしてるの？」

「なんでこんなこと始めちゃったの？ お金？ 家出？」

三人でベッドに並んで腰かけ、シアの身体を撫でまわしながら手コキさせつつ左右から質問責めしてくる中年二人組。

「ああ、すつごく柔らかいおっぱいだあ。シアちゃんは中等部生の割におっぱい大きいね。いつから大きくなったの？ 寝る時はブラつけてるの？」

コスチュームの隙間から手をつ突っ込んで少女の育ちざかりな乳房を揉みつつ、片方の中年が訊いてくる。

「お、おつきくなってきたのは……初等部の五年生くらいからで……んんっ、あはあ……そ、そんなに胸っ、乳首い……い、一応寝る時もブラは……んっ」

反対側からは少女の白く肉の詰まったすべすべの太ももをねちっこく撫でまわしながら、もう一人の中年がこれまたプライベートなことにズケズケと踏み込んだ事案そのものの質問を浴びせてくる。

「彼氏いるの？ もう初エッチはしたのかい？」

「そ、そんな……彼氏さんなんて、いませ……ひゃうっ」

「彼氏もいないのにこんなことしてるの？ いけない子だなあ。そんなにおじさんたちを誘っていやらしいことがしたいんだ。淫乱な中等部生なんだね、シアちゃんは」

答えなくてもいいことまでつい答えてしまう。恥ずかしいし、こんなことが露見したら学園にもいられないのに、少女の幼い精神とそれに反して早熟な肉体は過剰に反応し雄を求めてしまう。

幼い少女の生々しい性事情を知ってますます劣情を掻き立てられた中年二人は、コスチュームを半分以上引っぺがしてシアの肢体をあらわにした上で、揉むだけでは飽き足らず全身を口臭漂う舌で舐め回していく。

「ああおいしい、中等部生のほんのり汗の香りがたまらない、肌もきめ細かくて……じゅるるっ、んべろろろっ」

「はむっ、ふむむっ、じゅぶぶぶっ、ああシアちゃんの腋たまんないよ、それにおっぱいの下側に汗が溜まって……はあ、はあ、おじさんもう辛抱ならないよ、嫁や風俗の女なんか比べ物にならない、シアちゃんの若くてスケベな身体、ああもうこんなの舐めてるだけで射精しそうだよお……」

くすぐりたいし、綺麗とは言えない舌が全身を舐め回していくのはあまり気持ちのいいものではないはずなのだが、それすら快楽に変えてしまうのが淫紋。

そうして敏感になった少女は、彼らの舌がある場所に到達すると分かりやすく身を跳ねさせる。

「ああっ、おじさんっ……そこっ、そこもっつと、舐めて……」

「乳首がいいのかい？ この桜色の綺麗なぷっくりした乳輪、それとこのちっちゃく勃起した可愛い乳首、この乳首がいいのかいシアちゃんは？」

「ああもう、乳首一つとってもいかに俺の嫁がクソだったか分かるよ。まったくエッチな、どこまでスケベな中等部生なんだ、おじさんたちが両方吸ってあげるからねっ」

小さく敏感な蕾つぼみは彼らの舌にきゅうんつと反応し、その存在を主張し始める。

自分の娘ほどの少女の乳首に息を荒らげながらむしゃぶりつき、赤ん坊のように少女の乳を吸い上げていく四十代半ばの中年二人。

「じゅぷつ……シアちゃんのおっぱい美味しいよ、これでミルク出たら最高なのになあ」

「ごめんねシアちゃん、おじさん今だけ赤ちゃん返りしちゃうけど許してね、んぶじゅつ」

同時に乳首を吸われる二重奏が部屋に響き、シアの身体が疼き、淫紋が妖しく輝く。いけないと分かっているけど、こうなるとペニスへの欲が止まらない。

「あは……おっぱい吸うだけじゃ気持ちよくなれないでしょ……？ ふふつ、おじさんのおちんちん……いただきますーす」

「ああつ、シアちゃん！ 洗ってないのに……！」

シアは体勢を変えて、片方の中年ペニスを手コキしたままもう片方の肉竿にむしゃぶりつき精液を搾り上げる。

「おいひいつ、おじさんのおちんちん、わたしこれしゃぶつてると安心する……出してっ、出ひてっ、せーえきいっばいだひてええ……」

喋りながらのフェラに亀頭がこそばゆさを感じてビクンと跳ねる親父ペニス。

どちらの中年も獣のような呻き声を上げて感じてくれており、それがたまらなく嬉しくて、もつと頑張つて気持ちよくしてあげたいと思つてしまう。

「きもひいい、れすかつ？ うれひいつ、わたひもつと……んじゅつ、頑張り……まふね」
「うおお、シア、シアあああ！ こんな夜中におじさんたちを誘つてチンポ気持ちよくさ

せようなんて、この悪い子め、今からそんなんで将来が心配だぞっ……！」

「日本の教育はどうなつてるんだ、こんないたいけな女の子が精液を欲しがって男を誘惑するなんて……くそつ、このっ！ けしからん！」

少女の手技と口技にのけ反りながら快楽を貪り、野太い声を上げる中年たち。

片方の肉棒から口を離し、待たせてごめんねとばかりにもう片方のペニスへ口づけしてから啜えこみ、余つたもう一本は逆に手で優しく愛撫していくシア。

「おおお……！ ね、ねえシアちゃん、そのピンクの髪は地毛なのかい……？」
「ふえ……？ そ、そうですけど」

「サラサラで綺麗だねえ。よ、よかつたらさ、おじさんのチンポ、その髪でくるんでしょいてくれないかな、ねえ」

手でしごかれていた方の中年が、少女の頭を撫でながら興奮気味にそう求めてくる。

変身して伸びた詩愛のピンク髪を使って、より気持ちよくなりたいと邪な情欲を向けてくるのだ。

（か、髪の毛こんなことに使うなんて……でも、それで魔力が強まるなら……）

「は、はい……わかり、ました……」

「やってくれるのかい？ 嬉しいなあ、おおっ、おっ、そうだよ、そうやって、ああっシアちゃんの、シアちゃんの髪が俺のチンポを……！」

言われた通り、シアはピンクの地毛を肉茎に絡めた上で優しく握りしごいていく。

（こ、こんなのでいいの……？）

魔法少女になった際に伸びて色が変わるピンクの髪はシアのお気に入りなのだが、それを性欲処理の道具として使うなど想像だにしなかった。

しかし効果は靦面のようで、中年は野太い声を上げて歓喜に打ち震えている。

（こんな、知らないおじさんたちに、仕方ないとはいえこんなことして……いけないのにつ、もつと気持ちよくなってほしくてっ、勝手に手と口が頑張っちゃってるのお……！こ、これは淫紋のせいっ、淫紋のせいでこんなふうを考えちゃってるだけ、全部終われば元に戻るからあ……）

己を偽り、あくまでも義務だから搾精しているのだと自分を戒めるシアだが、純潔秘所



(な、なんで!? いきなり魔人になるなんてっ、そんな……!)

あまりの出来事に、一瞬だけ反応が遅れる詩愛。

その一瞬が命取りだった。泥水を押し固めたかのような濁った色に輝く、縦幅も横幅も自分の倍以上ある魔人となったホームレスが、そのまま詩愛に覆いかぶさる。

「グヘエエエ……ヤラセろ、ヤラセろオオオ！」

「ま、待って、待……んはああああ！」

体重もまた増加しているようで、変身前の詩愛の力ではびくともしない。

このままでは本当に危険だ。

「詩愛、変身するんだ！」

「だ、ダメ……お願いっ、やめ……」

魔力解放しようとするも、押しつぶされて力が入らない。

必死にブレスレットを巻いた右腕を伸ばし、精神を集中させて変身する。

「魔力……解放っ……!」

どうにか魔法少女になったシアだが普段の半分も魔力が集まっておらず、淫紋による大幅な弱体化を余儀なくされていた。底の抜けたバケツとクロケルが評したように、強化淫紋によって力のほとんどが漏出している。

そのデメリットは彼の挺身によって抑えられてはいるが、そうなる前に失われた魔力の損失が先のフェラによる搾精では補いきれていなかったのだ。

押しつぶしていた魔人を跳ねのけることもできず、結果としてただ着替えただけに終わってしまう。

「ウオオ、なんだお前、漫画みたいに变身すんのか！ ゲへへその姿もエロいなあ、チンポがますますいきり勃つぜえ！」

「やめてつ、やめてえええ！ 服つ、脱がしちゃだめええ！」

せっかく变身して着直したコスチュームが半脱ぎにされ、少女の中等部生にしては豊かなバストが再度あらわになってしまい。

その柔乳を魔獣の握力で揉みつぶされ、痛いはずなのに敏感になった少女の胸はあっさり絶頂してしまう。

「んはあああ！ おっぱいつ、おっぱい潰さないでつ、おっぱい揉みつぶされていつくううう！ おっぱい、おっぱいきもちいいつ、おっぱい揉まれていつてるのおお！」

「乳揉まれていつてんのか淫乱変身少女がオイ！ そんなスケベ中等部生の女には、ホームレスチンポで仕置きしなきゃならねえなあ!!」

自分の半分くらいの大きさしかない女の子を簡単に組み伏せ、股間の凶暴な雄魔人槍を

見せつける元ホームレスに、シアは「ひ……っ」とすくんでしまう。

(う、うそっ……おちんぼが、巨大化してるっ……)

魔人と化して体躯が変化し、ペニスもそれ相応に大きくなって勃起している。

人外の大きさとなったそれは、軽く見ても四十センチはあるし、イボのような突起が並んでいてグロテスクなことこの上ない。

あんなものを膣内に挿入されでもしたら——。

「ま、待って、そんなの入らないっ、入らないからっ！」

「うるせえ、女は男のチンポが入るようにできてんだよ！ いいからハメさせろ！」

必死に懇願するも文字通りに性欲魔人となった彼には届かず、中古品とはいえ幼さが残るシアの膣穴は巨大魔ペニスで無理やり押し広げられ蹂躪されていく。

「あ……っ、ああっ、あはああ……！」

痛覚は魔法少女になったことで緩和されているが、それでも身体を内側から引き裂かれていくような痛みを感じる。

あるいは処女を奪われたあの時以上だ。

なのに、それなのに、シアはこの苦境にあって感じてしまっている。

(うそっ、うそっ、気持ちいい……?! 痛いのにっ、痛いの気持ちいいっ、無理やり魔人

おちんぽに広げられて気持ちよくなっちゃってるのお……!!

これも淫紋によるものゆえか。

痛みと快楽がない交ぜまになった未知の感覚を楽しみながら、シアは魔人のものを半分ほど受け容れ——。

「ふん……ぬうっ！」

「んぎっ、んがあっ、あっはあああああ——！」

残りを一気に突き挿れられ、可憐な魔法少女は背骨が折れるほどにのけ反った。

勢いよく突き込まれたそれは少女の腹を内側から押し上げるほどで、内臓がひっくり返るような快楽で脳をかき回される。

「あ、ああ……おねがい、抜い、てえ……んああっ、らめ、動くのらめええええ！」

そればかりか魔人は雄の本能のまま、少女の小さな腰を掴んで前後に、激しくピストン運動を開始する。

竿部分のイボが膣壁を刺激し、出し入れのたびにシアへ未知の快楽を与え。

巨大かつ強大な亀頭の一撃は、子宮口を無理やり押し通って子宮内にまで届く。

「ウオオ、なんて絶品なガキマンコだ！ オラァチンポだ、チンポが好きなんだろ女はアアア！ オラ！ イけオラァ！ オラァアア！ イキ狂えオラァ！」

「あああつ、あがあああ！ おねがい抜いてつ、壊れるつ、こわれちゃううううう！」
突かれるたびに腹がボコつと出て、いまにも貫通して亀頭が出てきそうだ。

視覚的な恐怖が詩愛を包み、恐怖が快樂になつて危険なセックスの虜になつてしまう。
「こつ、こわいつ、こんなのいやつ、いやなのがいい！ すごい、おちんぼすごい、お腹にまで届くおつきなおちんぼしゅごいいい！」

十代のいたいな少女の腹を裏側から突き上げる極太ペニス。

少女の小さな身体を破壊しようと思えばできてしまう、それだけの攻撃性を示すように一突き一突きが暴力的だ。

快感の中にありながら本能的な死への恐怖を感じたシアは、絶頂しながら泣いて叫ぶ。

「死んじやう、しんじやうううう！ こんなすごいのでおまんこ突かれてつ、わたひのからだ壊れて死んじやうのおお！ んああああイクイクつ、死んじやうつ、イクつ、おねがいゆるひてつ、ゆるひでえええ！」

「うるせえ死ねオラ！ チンポで壊されてイキ死ね！ 女はイキながら死ぬのが幸せなんだよ、壊れようが俺の知ったことかオラ！ 死ね！ チンポで死ねメスガキ！」

だが、男とは本来女を犯して自分だけが気持ちよくなればいい生き物なのであり、その過程で女が死のうが関係ない。

女は道具であり、壊れたら別の道具を使えばいいだけ。

魔人と化した彼もそういった男ゆえの当然の思考回路のまま、使い捨てオナホールを存分に味わい快楽を貪る。

一方で、男にそう扱ってもらえることにシアの中の雌本能が悦びの嬌声を上げてしまい、少女は快楽と死の境目を反復横跳びしながら、もつともつと凶暴ペニスを求めて膣を締め上げる。

「しゅごい、しゅごいつ、おちんぼしゅごいいいいい！　ぶつとくてでつかいおちんぼつ、女の子のことめちやくちやにきもちよくするおちんぼおおお！　おちんぼ好きつ、魔人おちんぼ好きつ、魔人に犯されるのしゅつごいいいいいいい！」

人外のペニスに、膣をぎりぎり広げられ腹を内側から突き上げられる感覚。

無理やり犯されるといふ、女としての快楽をえげつないほど叩き込まれ詩愛は海老反つて何度も何度も絶頂する。

「もつと、もつと犯してつ、魔人ちんぽでもつとシアのことレイプしてえええ！　イクイクイクつ、ずっといつてるつ、イクの止まんないのおおおお！　きもちいいつ、魔人レイプぎもちいい——！」

「ウオオオ射精すぞつ、女のマンコに精液全部出してやるからな、有難く受け取りやがれ

メスがアアア！ オオツ、オオオオ、オオオオオ——！」
天が震える雄叫びのもと。

魔人となった彼は、パンクしてもおかしくない量の特濃魔人精液を、シアの子宮の中へ直接ぶちまけた。

どぶつつつぶぼばびゆりゆぐりゆりゆつ、どぶぶぶぶつびゆぐりゆるるる！

ぼばぶつびゆぐぶゆばべゆつびゆるぐるるるつ、ぶつつつどばびゆぼぶりゆりゆ！

「はあああああ——！ せーえきつ、なかだしつ、魔人せーえき腔内射精いいいい

——！ きもちいいつ、おまんこつ、おまんこなかだひされでイっでりゆううう——！

こんなのらめつ、こんなすごいのらめつ、魔人に犯されるのしゅごすぎておかひくなつちやうううう！ まだでてりゆ、まだでてるのつ、まじんのちんぽすごすぎりゆうううう！」

「オラアア孕め、ガキがガキ孕めエエ！ 俺のザーメンでガキ産めつ、ウオオオ！」

ぶびゆばばびゆぶつ、どっぼびゆるるつ、びゆぶぶつ！ ぶびゆ！

魔人は満足するまで三分近い射精を小さな子宮に叩き込み、その間少女はずっと腔内射精絶頂に身を震わせ後半からは「あーっ、あー……」とうわごとのごとく言葉にならない声を出しながら腔内射精を甘んじて受け入れていた。

(しゅ、しゅごい……魔力、すっごい集まる……この力、これだけあればお姉ちゃんだつ



て……あは……気持ちいいし、強くなれるし……魔人とエッチするの、最高……らよお……)

「ウオオ、すっげえ射精^でするぜ……やっぱ中等部生のマンコだからか、しかももつともつと射精できそうだ……今日は軽くあと十発は膣内射精するぜえ」

一方で魔人と化したホームレスは自らの身体の変化にまだ気がついていないのか、大量射精に驚きつつもなおのことシアを犯す構えを見せていた。

「う、うそお……そんなに犯してっ、膣内射精してくれるのお……？ しゅごい、魔人の性欲しゅごいよお……」

「シア、すっかりするんだ！ 魔人を放っておいたら大惨事になってしまう！」

恍惚としていたシアだったが、クロケルの叫びで魔法少女としての使命を思い出す。

経緯はともかく、魔人が出現してしまった。

元に戻さなければ、街や人に被害が出てしまう。

脱力していた身体に活を入れ、自分を押しつぶす魔人を跳ねのけながら立ち上がる。

「ええいつ！」

「グオ……ッ!？」

その膂力は、魔人どころかシア本人さえも驚くべきもので。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【偶数月】隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】毎月配信
書籍版は奇数月発売!



二次元
ドリームマガジン
3D DREAM MAGAZINE

UN コミック
アンリアル

**敗北乙女
エクスタシー**
SHOENEN GAKKI



あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

新刊 姫騎士

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!

小説家になるこの男性向けサイト「アークターシノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!



リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル

フリーダム120%!? ジャンルにとわれないドキドキラブ!

4年連続ベストセラー

二次元ぷち文庫



二次元ドリーム文庫